通巻612号

紅葉坂 教会だより

2019年11月 NO.8
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
牧師　荒井仁

説教

「ユダ」

荒井仁

ヨハネによる福音書
6章60節～71節

今朝の物語はイスカリオテのユダについて語ります。7章ではイエスの兄弟たちの不信仰についても記しています。イエスに対する信頼のともし火が徐々に消えていき弟子たちもイエスに反発します。人々が離れて行くときにイエスは十二弟子に「あなたがたも離れて行きたいか」と尋ねられました。

社会状況が厳しい時代に信仰を貫くのが難しくなるのは、歴史の中でしばしば経験されて来ました。日本では第二次大戦の時にキリスト者は信仰の危機に立たされました。天皇とイエスとどちらが偉いかという問いは、時に信仰者を獄へと送り込み、中には残念ながら獄中死した人もいました。

信仰の危機は植民地にも訪れます。朝鮮半島のキリスト者は、その頃、半島の北側に多く住んでいました。後に半島が分断されて北側から南側に逃げたために韓国のキリスト者の数が人口の25％前後にもなりました。

明治学院大学で教鞭を取っておられる徐正敏（ソジョンミン）先生が、当時の信仰弾圧の様子についての論文を書いておられます。日本のキリスト教界では、天皇崇拝、神社参拝、再臨信仰という弾圧に関する主な項目をまとめて扱う傾向がありました。しかし徐先生はこの三つを分けて、教派や人によって対応が違うことを明らかにされています。当時は神社参拝の強要によって国民意識を養い天皇崇拝強要によって臣民意識を涵養して、国家宗教による単一共同体を志向して戦争遂行のための国家建設を目指していました。

再臨信仰を弾圧することで、天皇を中心とした世界観、歴史観を共有することを徹底しようとしました。その時代にキリスト者が皆同じ対応をしたのかというと、そうではありません。保守的、伝統的な長老教会では、神社参拝には反対をしましたが天皇崇拝は容認します。再臨信仰は弱いものでしたから問題とはなりませんでした。根本主義的な長老教会では神社参拝と天皇崇拝に反対をしましたが再臨信仰は強くありません。ホーリネス教会、バプテスト教会などは、神社参拝と天皇崇拝は容認していました。しかし再臨信仰は強く持っていました。神社参拝、天皇崇拝を偶像崇拝として斥けたグループから見るとそれらを容認したキリスト者たちはイエスを裏切ったことになってしまいます。

ここで私たちが忘れてならないのは、朝鮮半島のキリスト者に神社参拝を強要するに当たり日本人キリスト者がこの罪に加担をしていたという歴史です。植民地支配の罪に加えて朝鮮のキリスト者を信仰の危機に立たせてしまった罪は悔い改め続けるべき課題の一つです。特にホーリネスの教会は本土と同じように朝鮮半島でも解散させられました。かつて紅葉坂教会は、ホーリネスの教会の方が礼拝に来られた時に追い返してしまったという重い負の歴史を負っています。裏切りやつまずきは状況が生み出すことがあります。個人的な弱さに問題の根幹を見るだけではなく、情況的要素にも思いを向ける必要があります。そして自分たちが相手を裏切らせない、つまずかせないように心がけるのも、私たちに与えられた課題であり責任ではないでしょうか。

私たちは、罪を犯し、罪を犯させる歴史を重ねてきました。これは罪の歴史でもありますが同時に神の赦しの歴史でもあります。この恵みに信頼して悔い改めと謝罪と和解の歴史を形成したいものです。

（参照：「協力と抵抗の内面史」富坂キリスト教センター編122頁―153頁）

（2019年11月17日礼拝説教より）